

ペア・グループ学習 を考える

—新しい学習指導要領が目ざす指導

新しい学習指導要領が告示されました。
各教科の指導においては、
主体的・対話的で深い学びの実現に向けた
授業改善が求められています。
国語科では、具体的に、どのような指導を意識していけばよいのか、
今回はその一例として、ペア・グループ学習を取り上げます。
すでに多くの授業で取り入れられている活動ですが、
これからの指導の方向性を意識しながら、
改めて考えていきます。

ペア・グループ学習

Q&A

ペア・グループ学習の目的は何なのでしょう。
また、どんなときに行うとよいのでしょうか。
興水かおり先生（玉川大学客員教授）が、交流学習のポイントについてお答えします。

Q ペア・グループ学習の特徴 (目的) や利点は何でしょ うか。また、気をつけるべ き点は何でしょうか。

A ご質問にお答えする前に、学習
の形態について少し整理いたしま
しょう。皆さんは日頃の授業ではどのよう
な形態を取り入れていらっしゃいますか。

まず、浮かぶのは**一斉講義式の形態**。一
人の教師が多くの子どもに一斉に指導内容
を理解させたい場合によくとられる形態で
す。しっかり話を聞き、大事なところ（要
点や中心点）が把握できる能力をもった集
団には効果的です。この形態は、「受け止
める」学習の典型といえるでしょう。教師
の発問に対して一部の子どもの挙手による

発言で進む授業は、既定の路線からの逸脱
もなく時間どおりに進行はしますが、ほと
んど子どもはただ言われたとおりに読ん
だり写したりするだけの受け身な学習の域
を出ない授業になりがちです。

こうした課題に対して、個を生かすこと
をねらった**ペア学習やグループ学習**といっ
た形態があります。学習者一人一人が問題
解決に向けて主体的に関わり、自分の考え
を相互に表現し合うことで思考の整理・深
化を目ざす学習形態の一つといえるでしょ
う。

二人組で行うのがペア、三〜六人程度で
行うのがいわゆるグループ学習。ペアの場
合は、座席を移動することもなく、すぐ近
くの相手（多くは隣どうし）で活動できる
という利点があります。いっぽう、グルー
プの場合は、多様な考えを比較・交流でき

るため、思考の広がりや深まりを手助けす
る利点があります。どちらも、一人一人に
活動の場を保障するという点は共通です。

ペア学習は、簡易に確かめ合う場、伝え
合う場として短時間で実践できます。いっ
ぱう、グループ学習は、主発問に関わる学
び合いに適しています。役割を決め、時間
を計算して計画的に練り上げるという活動
になります。三人組での学習は、全員が当
事者にならざるをえない場として有効です。
ペア学習をたつぷり経験したら低学年から
でも取り組むことは十分可能です。

この形態を有効に活用するためには、い
くつかの留意点が必要です。

- ①一人学びの時間をたつぷり取り、机間指
導を通じた細やかな個別指導をする
- ②何について明らかにするのか、活動の目
的を明確にしておく

- ③人数に応じて時間を調整し、学習者が見通しをもって活動できるようにする
- ④考えの根拠になった叙述や体験を必ず入れるようにする
- ⑤グループで意見が分かれたときには、併記して発表するように習慣づける

ペアやグループでの交流活動は、授業のどんなタイミングで取り入れるのが効果的でしょうか。

A 学習内容や、学習集団、その時間の学習方法でも変わってきますから、一概に「ここで」とは言い切れません。一単位時間の中で計画的に位置づけるとしたら、一人学びの後、自分の考えを友達と比較させたいとき。単元指導計画の中では最終次の制作物を評価し合う場面などが一般的です。授業中、臨機応変に取り入れる場合もあります。例えば、論点が明確になり、どちらか選択させたいときや、逆に、思考が硬直して行き詰まったときなど、子

どもに授業の内容を再整理・再構築させるのに有効です。

簡単な確認事項や、活動の進捗状態を意識させるときには隣どうしのペアを使うと確実です。また、学習進度に差が出やすい課題の場合、できた者どうしのペアで交流すると、効果的です。この場合は、交流スペースをあらかじめ用意しておくなどの配慮が必要です。

グループでの交流活動が苦手な子どもが多いのですが、どのような指導をすればよいでしょうか。

A 一つは、マニュアル化とモデル提示です。

ある程度の型が示されれば、それに従って進める安心感があります。映像教材や教師手作りのビデオなど、実際にモデルを示すことで具体的なイメージが浮かびます。日常的には、一つのグループをモデルに、教師が進行役になって方法を見せることも

有効です。進行方法を共有するために「進め方…虎の巻」など、マニュアルを子どもたちと作っている実践もあります。発言に対する反応の言葉を引き出す「対話的な話型」を学級で共有しておくといでしょう。二つ目は体験の積み重ねです。経験知は確かな理解につながります。

国語の授業では、一人一人が司会者や記録者になるための技能を獲得することが大切です。そのために、全員がそうした役割を経験できるように配慮する必要があります。獲得した技能は、活用して初めて身につきます。教科を超えてあらゆる機会に意図的な交流活動、グループ活動を経験させることで、確実な習得につながりましょう。

三つ目は個別指導と評価です。

特に自信のない子、なかなかグループの学習に入り込めない子については、一人学びの時間に細やかな支援をし、グループ内で伝えるべき内容を確認しておくこと、発言順を一番にし、その子の発言内容に絡んだ反応をグループのメンバーから引き出すことが大切です。教師は各グループの活動をしつかり観察し、よいところをすかさず褒める「評価で指導する」ことが効果的です。

グループのメンバー構成はどのように決めたらよいのでしょうか。

A 活動内容や、目的によっても違います。生活班を基盤にするのが一般的でしょうが、学力差や興味・関心の違いに応じたグループ編成も必要な場合があります。生活班の編成のしかたにもよりますが、低学年は、そのままの人間関係を生かしたグループ編成のほうがコミュニケーションを取りやすい場合が多いでしょう。学年が上がってくると、目的的な編成も自在にできるようになります。例えば、選んだ課題や題材が同じグループ、逆に異なるグループなど、効果的な編成を工夫したいものです。思考を深めるには、同じ課題・題材のグループで、思考を広げるには異なる課題・題材のグループが効果的でしょう。例えば、「宮沢賢治の世界を紹介しよう」という活動の場合、選んだ作品ごとのグループで、その作品理解を深める。次に、それぞれ異なる作品を味わったグループで自分の選んだ作品について紹介し合い、「宮

沢賢治のものの見方や考え方」について広げる。そのうえで、一人一人が自分なりの「宮沢賢治の世界」をまとめて、全体交流してみる。このような、同じ課題・題材のグループでの学び合いの結果を、違う課題・題材どうしが持ち寄るといって、いわゆる知識構成型ジグソー法的な展開も、このごろよく見られるグループ学習形態の一つです。

新しい学習指導要領の方向性を踏まえたうえで、特に気をつける点がありましたら教えてください。

A 新しい学習指導要領の目玉ともいえる「主体的・対話的で深い学び」（いわゆるアクティブラーニング）と、ペア学習・グループ学習という学習形態は深く関わっています。一人一人の課題意識を持続させ、主体的な学びの姿勢、学びへの当事者意識を保つためにも、グループ学習は有効な手段の一つです。

この学習形態で効果を上げるには、「一

人学び」の充実が不可欠です。

「0×8（無限大）⇔0。自分の考えが0なら、どんなにグループで交流しようが結局自分のものとして残るものは0ではない、たとえ0.1、0.01しかない考えであっても、0でない限りは、無限大になる可能性がある」。これが私の持論です。

「一人学び↓表現して友達と比較・検討↓全体で確認↓もう一度自分の考えを深化させて表現」といった思考・判断・表現活動を教科横断的に日常化することが、「主体的・対話的で深い学び」を作り出すと思います。他者と比較する自分なりの考えをしつかりもたせたうえで、ペア学習やグループ学習に臨むという習慣を毎日の授業で体験的に培っていくください。



おしみず 奥水かおり

広島県生まれ。玉川大学教師教育リサーチセンター客員教授。23年の教員生活の後、港区教育委員会指導主事、東京都教育庁主任指導主事、小学校校長等を経て、現職。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。